

2020 (令和二) 年度 共同利用研究・研究成果報告書

研究課題名	和文：ライチョウ保護増殖事業 英文：The conservation program of Rock ptarmigan
研究代表者	奥山正樹（環境省信越自然環境事務所）*2020年6月に異動 堀内 洋（ // ）*2020年7月に着任
参加研究者	堀内 洋（ // ） 有山義昭（ // ）*2020年4月に着任 小林 篤（ // ）*2020年4月に着任 中村浩志（中村浩志国際鳥類研究所）

研究成果概要

1. 乗鞍岳野生ライチョウのケージ保護

令和2年5月から行った事前調査において、乗鞍岳の高山帯全域で75のなわばりを確認した。このうちケージ保護候補は宇宙線観測所建屋周辺の10個のなわばりとし、このうち6つの巣を確認した。6月末に、宇宙線観測所乗鞍岳観測所敷地内にライチョウ保護用ケージ3つを設置し(図1)、7月2日から5日までに孵化した3家族を8月1日まで保護した(図2)。ただし、第3



図1. ライチョウ保護用ケージを設置した位置

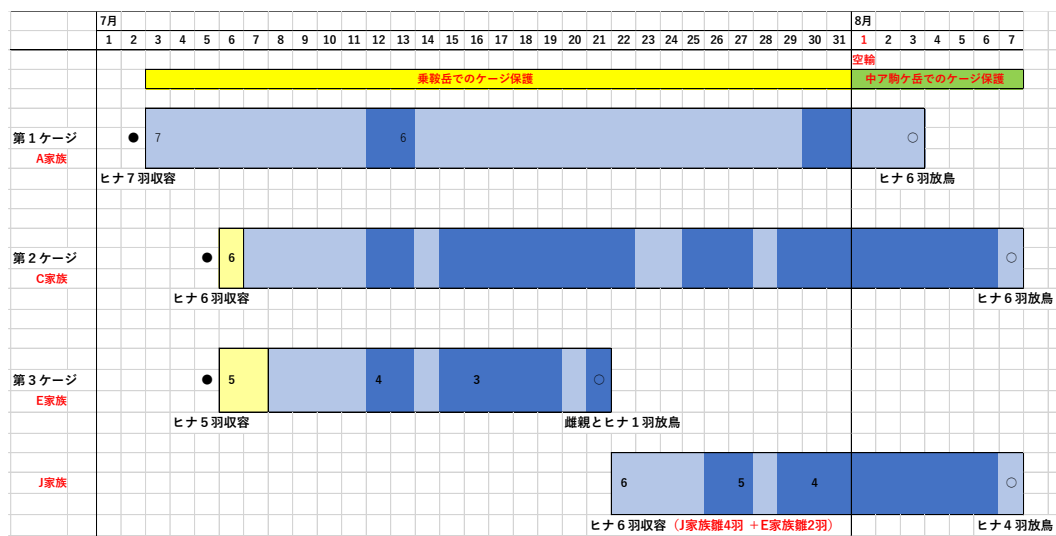


図2. 各家族の孵化タイミングとケージ保護期間. 黒丸が孵化日、薄黄色が小型移動式ケージでの保護期間. 青色は固定ケージで保護した期間. 図中の数字が雛数.

ケージの家族（E 家族）は雌親の育雛行動に問題があったこと、ケージ保護して 2 週間程度で雛が 3 羽死亡したことから、22 日に発見した J 家族を新たに保護し、E 家族の雛 2 羽についても J 家族と合流させた。令和 2 年は計 22 羽の雛を保護し、ケージ保護期間中の薬 1 ヶ月間で 6 羽の雛が死亡したため、雛の生存率は 72% だった。

これまで南アルプス北岳において 5 年間に渡って実施したケージ保護事業における雛の平均生存率は 80% であったため、令和 2 年度は若干低い結果となった。これは今年度の天候が非常に悪く衰弱してしまった雛が多かったことが一因と考えられる。

2. ライチョウが絶滅した中央アルプスへの移送

8 月 1 日まで保護した 3 家族 19 羽（雌親 3 羽と雛 16 羽）をヘリコプターを用いてライチョウが約半世紀ぶりに確認された中央アルプス駒ヶ岳へ移送した。当初初の予定では 7 月 23-26 日にヘリコプターを用いた移送を行う予定であったが、23 日から天候が悪く、以後も回復が見込めなかったため移送を延期した。再度日程調整を行い 8 月 1 日に移送を行った。

移送に当たっては雌親とヒナを別々のネットにいれて、家族毎に段ボールに入れてヘリコプターに搭載した（図 3 a, b）。中央アルプスへの移送時間は約 20 分であった。また、移送後は 1 週間程度現地環境に慣らすために中央アルプスにおいてもケージ保護を行った後 8 月 7 日までにすべての家族を放鳥した。ヘリコプターによる移送中及び中央アルプスにおけるケージ保護期間中における個体の死亡はなかった。

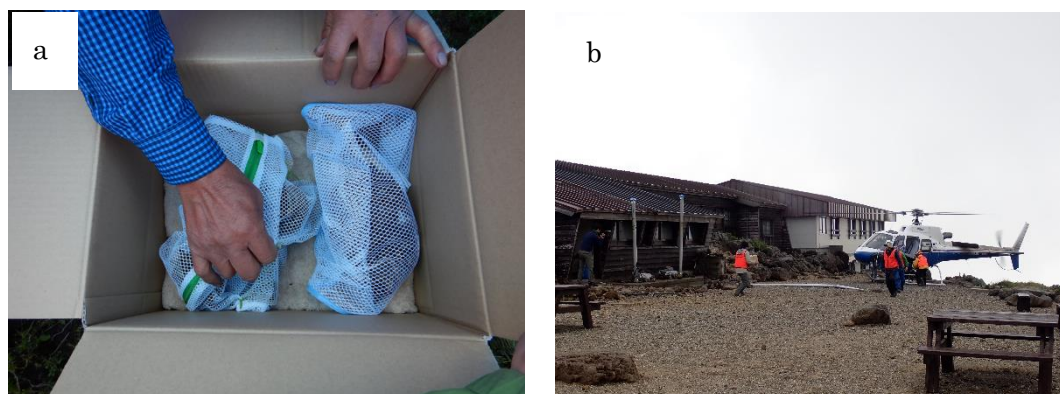


図 3. a ライチョウ移送箱内の様子. 左の袋が雛、右が成鳥を入れた袋. b 乗鞍岳肩の小屋園地に着陸したヘリコプターにライチョウを搬入する様子.